

# くりかへし符号の使ひ方



Exported from Wikisource on 05/24/17

くりかへし符号の使ひ方  
文部省教科書局調査課国語調査室  
1946年

- 出典：文化庁国語施策参考資料  
([http://kokugo.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/joho/kijun/index.html](http://kokugo.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/joho/kijun/index.html))
- 原文：[NDLJP:1126387](#)



この著作物は [政府標準利用規約（第2.0版）](#) に準拠した [ウェブサイト](#) の規約に定める条件下で利用することができます。政府標準利用規約（第2.0版）が適用されるコンテンツでは「[クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際](#)」と互換性がある旨明記されています。



この文書は、[クリエイティブ・コモンズ](#) に示される [クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際](#) のライセンスの下で利用を許諾されています。

- これは、昭和二一年三月、文部省教科書局調査課国語調査室で作成したもので、文部省で編修又は作成する各種の教科書や文書などの国語の表記法を統一し、その基準を示すために編纂した四編の冊子のうちの一編です。
- この案は、発表以来半世紀を経ていますが、現在でも公用文、学校教育その他で参考にされています。
- なお、漢字の字体は、便宜上、現行のものに改めました。

くりかへし符号の使ひ方〔をどり字法〕

## (案)

本省で編修または作成する各種の教科書・文書などの国語の表記法を統一し、その基準を示すために、

- 一. 送りがなのつけ方 (案)
- 二. くぎり符号の使ひ方〔句読法〕 (案)
- 三. くりかへし符号の使ひ方〔をどり字法〕 (案)
- 四. 外国の地名・人名の書き方 (案)

の四編を印刷に付した。この案はその一つである。

諸官庁をはじめ一般社会の用字上の参考ともなれば幸である。(文部省教科書局調査課国語調査室)

### まへがき

一、この稿は、くりかへし符号を用ひる場合の基準を定めたものである。

二、くりかへし符号は同字反復の符号である。これまで、でい 疊字・ぢうもん 重文・送り字・重ね字・をどり字・ゆすり字・ゆすりかな等と呼ばれて来たものであるが、この稿ではさらにあらたに一つの符号を取り上げるとともに、これらの性質を分かりやすく言いあらはし、かつ一般に通じやすいと思はれる呼び名として、かりに「くりかへし符号」といふ名を用ひた。

三、くりかへし符号は左の五種である。

一ツ点	ゝ	かなにつけて用ひるもの
くノ字	/	かなまたはかな交りの語句につけて用
点	\	ひるもの
どう		
同ノ字	々	} 漢字につけて用ひるもの
点		
二ノ字	々 (ゝ)	
点	)	
ノノ点	〃	数字や語句を代表するもの

右、各種の符号の呼び名は、一部は在来のもので、一部は取扱ひ上の便を考へてあらたに定めたものである。

四、くりかへし符号の用法の中で、これまで最も統一を欠いてゐたのは、例へば「ぢぢ」「ばらばら」のごとく語頭に濁音をもつことばの書き方であつた。すなはち、「ぢぢ」「ばらばら」を書く場合に次のごとき三様の書き方が行はれてゐたのであるが、この案では、その中の(一)の書き方に従つた。

- (一) ぢゝ ばら〈
- (二) ぢゝ ばら〈
- (三) ぢゝ ばら〈

五、くりかへし符号は、同一の語の中で用ひることを原則とし、次のごとき場合にはかなを重ねて書く。

(一) 話したために 読んだだけで  
それとともに さうしたもののみ  
そののち いままで  
行っただらう すべてです

(二) 香川県 かかひけん 馬場氏 ばばし 平の知盛 たいら とももり

(三) パパ ママ チチハル

〔付記〕右の原則によって、例へば「立てて」を「立てゝ」と書くのはよくないといふ人もあるが、しかし、この「立てて」などは、一方から見れば「立つ」と「て」との二つの単位から成ってゐるものであるが、一方から見れば「立てて」でもって一つの単位を成すものであるから、やはり同一語中の用例であるといふことができる。ゆゑに、「立てゝ」の類の書き方も認められる。

つぎに、日常の文書において使用率の高い「ことゝ」「ものゝ」「○○町々会」などの書き方も、これを許容的に認めておくことが現代一般の慣用に照らしておだやかであらう。

六、くりかへし符号はテン（読点）をへだてゝは用ひない。例へば――

「こ、こ、こ、こ。」と、おやどりがよぶ。  
「ちゝ、ちゝ。」と鳴く小鳥の声、  
ド、ド、ドーツといふ波の音、  
さら／＼、さら／＼と葉ずれの音がして、  
「あつ、兔、兔。」

一步、一步、力強く大地をふみしめてゆく。

〔付記〕くりかへし符号の適用は、右のごとく一種の修辭的用字法、すなはち文のリズムを表現するものである。

呼び名  
符号

準則

用例

<p>(1) 一、 つ 点</p>	<p>一、一つ点は、その上のかな一字の全字形（濁点をふくむ）を代表する。ゆゑに、熟語になってにごる場合には濁点をうつが（例2）、濁点のかなを代表する場合にはうたない（例3）。</p> <p>二、「こゝろ」「つゝみ」などを熟語にしてにごる場合には、その「ゝ」をかなに書き改める（例4）。</p>	<p>1. ちゝ はゝ 2. たゞ ほゞ 3. ぢゝ ばゝ 4. づつ <small>こづつみ</small> 小包 <small>まごころ</small> 真心 案内が かり 気がかり く まざさ</p>
	<p>〔備考〕「ゝ」は「ゝ」をさらに簡略にしたものである。</p>	

一、「／＼」は、二字

1. いよ／＼ ます／＼

以上のかな、またはかな交り語句を代表する (例12345)。

(2) く  
の  
字  
点

〔備考〕 「く」  
は「ええ」「え  
+く」を経て「  
く」となったも  
のである。

2. しみく それく
3. しげく しばく
4. ばらく ごろく
5. 一つく 思ひく 散りく  
代わるく 知らずく  
くり返しく ひらりく  
エツサツサく

一、「々」は漢字一字を代表する (例12345)。

(3) 同  
の  
字  
点

〔備考〕 「々」  
は「全」の字から転化したものと考へられてゐる。

1. 世々 個々 日々  
われく きんく ちかく
2. 我々 近々 近々
3. 正々 堂々 年々 歳々
4. 一歩々々 賛成々々
5. 双葉山々々々

一、「々」は、手写では「々」と同価に用ひられるが (例1)、活字印刷では

「々」の方が用ひられる (例2)。

二、活字印刷で用ひる「々」は「々」の別体であるが、その働きは、上の一字を重ねて訓よみにすべきことを示すものである (例34)。

三、「唯<sup>たゞ</sup>」は「唯々」とは書かない (例5)。

四、「各<sup>おの</sup>の」「諸<sup>もろ</sup>」(4) 々の」は「々」がなく二 (ても読みうるが (例6 の 々 7) 、普通には「々」 々 をつける (例8) 。

五、「々」は「々」で代用される (例9 10)。殊に「多々益々」ではかならず「々」を書く。

1. 草々
2. 草々
3. 稍々 (や々) 略々 (ほ々)
4. 愈々 (いよ々) 各々 (おの々) 旁々 (かた々) 交々 (こも々) 屢々 (しば々) 抑々 (そも々) 偶々 (たま々) 熟々 (つら々) 熟々 (つく々) 益々 (ます々)
5. 唯 (たゞ)
6. 各 (おの々) の意見
7. 諸 (もろ々) の国



〔備考〕 「ㄣ」  
は「二」の草書  
体から転化した  
ものと考へられ  
てゐる。

それを小さくして右  
に片寄せたものが即  
ち「ㄣ」である。

〔付記〕 例  
3456789の類の語  
は、なるべくか  
なで書く方がよ  
い。

8. 各々 (おの<sup>レ</sup>) 意見を持  
ちよつて  
9. 各々 (おの<sup>レ</sup>)  
益々 (ます<sup>レ</sup>)

10. 多々益々

1.

月 日 円 備考

1 25 1000

〃 〃 2500

〃 〃 1235

〃 26 1000

2 1 1500

〃 〃 1000

2.

甲案を可一

一、「〃」は簿記にも文章にも  
用ひる (例12)。

〔備考〕 「〃」は外国語で  
用ひられる「”」から転化した  
ものであり、その意味は  
イタリア語の Ditto 即ち「同

(5)  
ノ  
ノ  
点

上」といふことである。なほ国によって「“」の形を用ひる。

とするもの	二八
乙案	三一
”	一九
丙案	二六
”	五

# About this digital edition

This e-book comes from the online library [Wikisource](#)<sup>[1]</sup>. This multilingual digital library, built by volunteers, is committed to developing a free accessible collection of publications of every kind: novels, poems, magazines, letters...

We distribute our books for free, starting from works not copyrighted or published under a free license. You are free to use our e-books for any purpose (including commercial exploitation), under the terms of the [Creative Commons Attribution-ShareAlike 3.0 Unported](#)<sup>[2]</sup> license or, at your choice, those of the [GNU FDL](#)<sup>[3]</sup>.

Wikisource is constantly looking for new members. During the realization of this book, it's possible that we made some errors. You can report them at [this page](#)<sup>[4]</sup>.

The following users contributed to this book:

- CES1596
- Great Brightstar
- Sakoppi
- Sat.d.h.

---

1. ↑ <http://wikisource.org>

2. [↑ http://www.creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0](http://www.creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0)
3. [↑ http://www.gnu.org/copyleft/fdl.html](http://www.gnu.org/copyleft/fdl.html)
4. [↑ http://wikisource.org/wiki/Wikisource:Scriptorium](http://wikisource.org/wiki/Wikisource:Scriptorium)